

■動物相談42例からみた、アニマルホメオパスに求められること

日本ホメオパシーセンター北海道オホーツク北見

JPHMA 認定ホメオパス No. 0804

JPHMA 認定アニマルホメオパス No. A0115

獣医師

船越 規子（ふなこし のりこ）

【概要】

犬や猫へのホメオパシーの利用は、まだ少ない。しかし、犬や猫がペットとしてではなく、「伴侶動物」すなわち家族として暮らすようになった昨今、ホメオパシーを動物にも利用したいと希望する飼い主さんは増加傾向にある。この1年間に当センターに寄せられた、犬と猫に関する相談を振り返り、今後、アニマルホメオパスに求められることを考察した。

【方法】

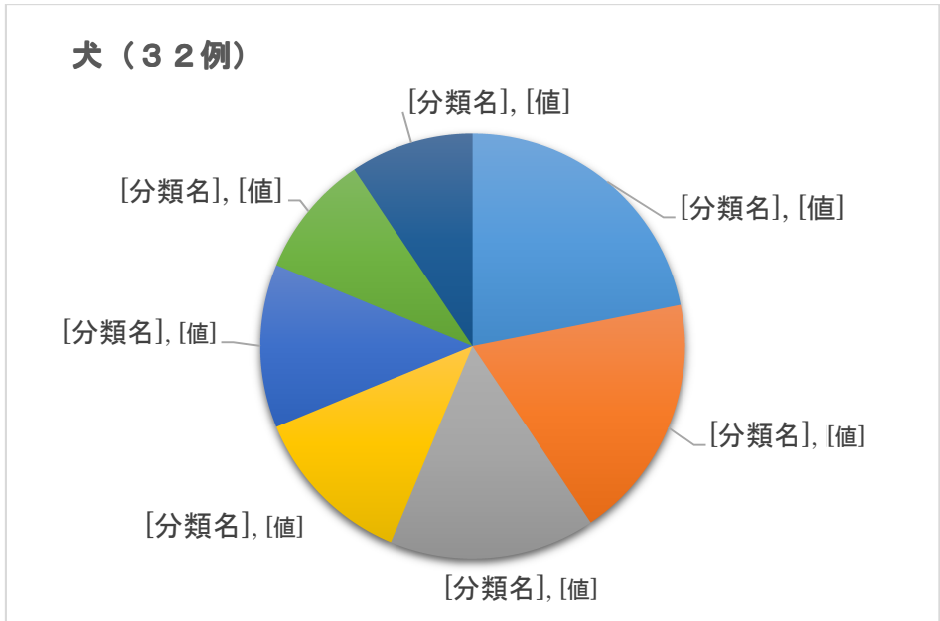
2015年6月から2016年8月の間に、当センターに寄せられた、犬32例、猫10例、計42例の相談を以下の8項目に分類した。

- ①ワクチン・フードに関する質問
- ②肝機能不全、内分泌疾患などの慢性疾患
- ③腫瘍・ガン
- ④皮膚疾患
- ⑤加齢、看取りに関して
- ⑥急性疾患・事故
- ⑦問題行動・しつけ
- ⑧感染症

【結果】

犬（32例）

- ①ワクチン接種をどうするか、フードはどうかなどの基本的な質問が最も多く、ホメオパシー以前の問題であり、基本的な知識を持たずに飼い始めてしまう方も多いことが分かる。
- ②次に多い慢性疾患は、肝疾患などの臓器疾患、甲状腺機能低下症などの内分泌疾患であった。これら慢性疾患は、臓器サポート・薬剤の毒出し・根本体質治療などZENメソッドによるレメディーの処方で、半数以上のケースで改善が見られた。
- ③次いで多い、腫瘍・ガンが次いで皮膚疾患と続く。4例中3例はすでに、終末期であったため、レメディーで苦痛を最小限にした穏やかな看取りができた。残りの1例の乳腺腫瘍は、ZENメソッドで腫瘍が縮小しており、経過観察中である。
- ④皮膚病は、予防接種のレメディーを中心とした処方で、4例中3例で改善しており、ワクチン接種が原因と疑われる症例もある。
- ⑤腫瘍の末期でも同様だが、看取りについては、レメディーで対処しながら、自宅で穏やかに看取ることができている。過度な延命を避け、飼い主さんご自身が直接レメディーでケアすることで、心の準備も整い、愛犬に対する罪悪感や後悔の気持ちが少なく、ペットロス回避できていると感じる。
- ⑥急性症状・事故は、階段からの落下や下痢症であったが、いずれも基本キットのレメディーのみで対処ができている。
- ⑦問題行動・しつけについては、無駄吠えなどが主なものであった。犬だけでなく飼い主さんの心の問題へのアプローチも必要な場合が多い。
- ⑧室内で飼われる犬が増えたこともあり、犬では、感染症に関する相談はなかった。



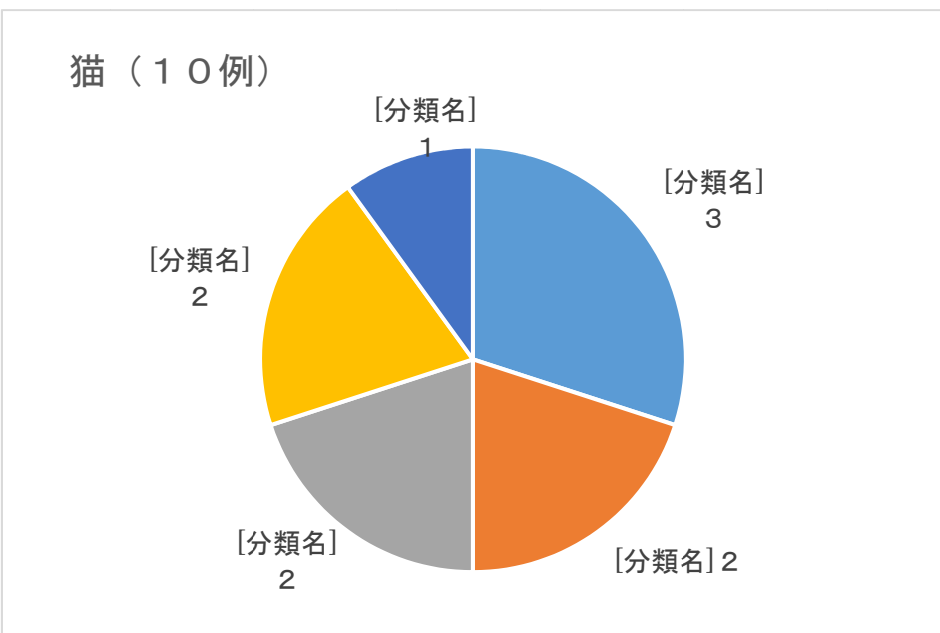
猫（10例）

⑥猫では、異物の飲み込みなどの急性症状が3例ともっと多く、いずれもキットのレメディーで対処ができています。

②慢性疾患については、気管支炎などだが、相談会でのZENメソッドでコントロールできている。

⑧猫での特徴は、犬ではなかった感染症に関する相談があげられる。野良猫の経験のある猫も多いこと、家の内外を自由に出入りさせて飼っている方もおり、猫においては、ウイルス性の感染症の相談がある。猫エイズキャリアの猫については、臓器サポートと猫エイズウイルスのレメディーで発症に至らずに過ごしている。猫で問題になる感染症予防のためにも、野良猫を増やさないためにも、室内飼いを徹底するよう啓蒙していく必要がある。また、猫特有のウイルス疾患には病原体のレメディー（ノゾーズ）の初期からの投与が有効である。

⑤加齢・看取りについては、犬と同様、穏やかな看取りができています。



【考察】

動物と人の両方の健康相談をさせて頂き、動物のケースと人間のケースとの違いは、メンテナンスコースすなわち、病気を持続させる原因となるものが大きい事だと感じている。

動物におけるメンテナンスコースは以下のものがあげられる。

1. 品種改良による不自然な体形
2. 近親での交配
3. 母子免疫の不足
4. 何世代にもわたるワクチン接種
5. フードやおやつに含まれる添加物
6. 不適切な飼い方
7. 飼い主さんの心の在り方

上記のことを踏まえ

アニマルホメオパスに求められることとして

1. 動物に関する正しい知識の啓蒙
2. メンテナンスコースに着目する
3. 飼い主さんの心に寄り添う

ことが重要である。

また今後、増加が見込まれる、伴侶動物へのホメオパシーの可能性として

1. メンテナンスコースの改善
2. 遺伝的背景へのアプローチ
3. 何世代にもわたる薬剤の負荷をはずす
4. 飼い主さんのインナーチャイルドの癒し
5. ペットの家庭での看取り
6. ペットロスの回避
7. 急性症状に対するキットでの対処

などがある。今後も、動物に、飼い主さんにも優しいホメオパシーの利用をさらに広めていきたい。

カテゴリー：[動物]